

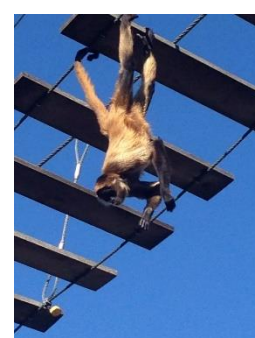
SGH関高・SGU京都大学連携事業：霊長類一日野外実習

日時：平成27年8月11日(火) 10:00～16:00

場所：日本モンキーセンター(JMC)・京都大学霊長類研究所 参加：希望者(14名)

レクチャーやフィールドワークを通じたアクティブラーニングにチャレンジしました！

- 松沢哲郎先生(京大霊長研教授、JMC所長)、高野智先生(JMC博士学芸員)のご指導で、「霊長類一日野外実習」を体験しました。今回の企画は、SGH関高校とSGU京都大学(霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院)連携事業。連携する京大リーディング大学院は、**学問と実践をつなぐグローバル人材育成をめざす機関**です。
- 午前中は高野学芸員のレクチャーを受けたあと、フィールドワークを体験しました。テーマは、フクロテナガザル、アヌビスヒビ、ジェフロイクモザル(右写真右)、ポリビアリズザル(右写真左)の4種の生態観察です。それぞれの歩き方、走り方、樹上での活動の仕方等を観察し、手足・尾との関連性、生息域や食性との関連性を推測しました。わずかな観察時間でしたが、フィールドワークの重要性や面白さなど、多くのことを学びました。
- 午後は徒歩で霊長研に移動し、見学の前に松沢教授との質疑応答がありました(下写真)。松沢教授には、7月30日の講演会及び談話会でもお世話になりました。
- 松沢教授そして霊長研といえば、チンパンジーの知性の研究で有名。チンパンジーたちが数字を認識・記憶し活用する実験の様子(下写真左)や、チンパンジー・タワー(下写真中)を見学しました。
- すでに解析されたヒトやチンパンジーのゲノムに続き、さまざまな霊長類のゲノムも解き明かされようとしています。世界最多66種類の霊長類を飼育するJMCと隣接する霊長研ならではの研究分野です。ゲノム分析のラボでは最先端の機材(シーケンサー)を見学し、研究員の方の解説を聞きました(下写真右)。



＜霊長類一日野外実習に参加した生徒の感想＞

- 日本モンキーセンターの高野先生の話聞いて、「さまざまな霊長類がいてその一つ一つが環境に適した体をしていること」、「その環境に適応するため進化していくこと」が分かった。僕は今まで進化と聞いてサルが人間のようになることだと思っていたが、生物が生存するために環境に適応した結果だということが分かった。
- 今回、日本モンキーセンターの研修を受けて、霊長類の多様性に驚きました。クモザル、テナガザル、リスザル、ヒヒ、チンパンジーを始めとし、さまざまな霊長類を見ました。手や足の長さや、歩き方など非常にたくさんあり、様々な環境に適応してユニークでした。恥ずかしながら、多くの霊長類が絶滅の危機に瀕しているということを知りませんでした。今まで、動物園などでよく見かける動物の一つなので、たくさんいるものと思っていました。さらに日本モンキーセンターでは、「チンパンジーがいつ人間に追いつくのか？」という質問する見学者がいるそうです。松沢先生の本にも、霊長類＝サルのイメージの人が多いと書かれていました。かなり人間中心の偏った考え方になっていると思いました。日本モンキーセンターでの研修はとても勉強になりましたが、そのことがとても気になりました。これからは、今までの考え方を改めて、人間中心に偏ってしまっている自分の考え方をただしたいと、とても思いました。



JMC博士学芸員の高野先生の講義

- 今回の研修では、学べたことが特に二つありました。一つは、霊長類の多様性についてです。園内のいろいろな種の霊長類のすがたや行動から、その種の生息地域や主食を特定することによって、それぞれがそれぞれの環境に適した進化をしてきたことがよく分かりました。さらに、森林伐採などの環境破壊によって、霊長類のすみかも減って絶滅の危機に瀕していることも知り、自分もできるような節電などはもちろん、このような危機があることを広く伝えたいと思いました。もう一つは、チンパンジーについてです。京大霊長類研究所で見たチンパンジーの実験はとても面白そうだったので、将来は研究職に就きたいという願望を強くしました。

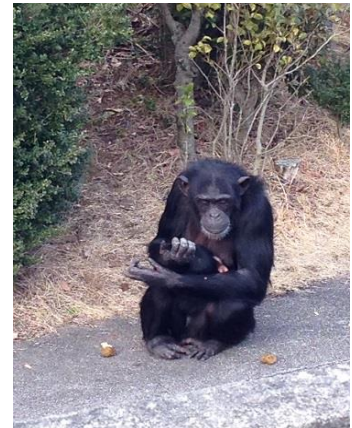


チンパンジーのアキラ(1976年生まれ)

見学に来た関高生に関心をもったよう。

- 今回のモンキーセンターの研修では、いろいろなことが学べました。特に新たに知ったのは、多くの霊長類が絶滅の危機に直面していること、日本人も霊長類のすみかを奪っていることです。日本国内ではあまり木などを伐採していないから、自然破壊とは無縁だと思っていたけれど、ほとんどの木材を海外から輸入していることから、霊長類の住んでいる熱帯雨林をどんどん破壊しているということがわかりました。このように、直接的に関わっていないことも、ちゃんと多くの日本人が知っておくべきだとも思いました。

- 今まで名前だけ知っていた生き物たち、もしくは名も知らぬ生き物たちが、実は環境にあわせて体を変化させていたり、コミュニケーションをとったり、確かに生きてきて、今まで進化しているのだということを感じた。暑くて日陰に休む姿は私たちと何らかわりないのに、私たちのせいでその数は減少する一方だという事実には胸を締め付けられるばかりだ。今日教えていただいたことは、言われれば納得するのだが、自分で調べることも発見することもできない。そんな知識と出会えたことをありがたく思う。また、それを探求する仕事はどれほど楽しくて生き甲斐になるだろうかと思った。



チンパンジーの母子(JMC)

- モンキーセンターで今回わかったことは、一口に霊長類といっても、たくさんの種類があり、それぞれの生活に適した進化を遂げていることだ。例えば、ポリビアリスザルでは、木の上で生活するために尾が長くなったりして、樹上四足性という形に進化している事が分かった。今回の活動を通じ、「生命のたくましさ」や「いかに人間が上から目線で見えていたか」について、改めて認識することができた。
- モンキーセンターでいろんな種類のサルを見て、体の仕組みや動きから、生息地や食べ物まで推測することができて驚きました。そして、私はまだまだ完璧に観察出来ていないことがわかり、次の機会には細部まで見られるようにしたいと思います。霊長類研究所では、チンパンジーが数字を順番に押していく姿が見られてうれしく思いました。本当に速くて驚きました。
- サルという一つのまとまりの中にも、いろんな環境で暮らしていて、それに適応できるように進化してきたことが分かった。また、進化というのは制約なしでできるものだと思っていたので、適応の結果であるという話を聞いて驚いた。霊長類研究所では、チンパンジーの学習の様子を間近で観察することができた。モンキーセンターのビジターセンターで、実際に同じ実験をやってみたが人間でもかなり難しかった。



霊長類研究所の正面玄関にて

松沢先生(前列最右)、高野先生(前列最左)